

中国人上級学習者の相手言語接触場面と
第三者言語接触場面におけるスピーチレベル管理について
—「対友人」会話に注目して—

陳 新

A Study on Speech Level in Third-Party and Partner Language
Contact Situations by Chinese Learners of Advanced Japanese :

Focusing on Conversation between Close Friends

Chen Xin

文末文体有敬体和简体之分，根据谈话对方及场面的不同，使用或者转换相对应的文末文体。本稿作为阐明日语学习者的有关文末文体转换基础的研究，调查了在「友人」谈话中，中国学习者的文末文体的使用情况。具体以 6 名高级日语学习者（以下为“CNS”）为研究对象，设定了两个场面：一个是 CNS 与日语母语者为对象的对方言语接触场面（以下为“对方言语场面”）；另一个是 CNS 与非日语母语者（韩国日语学习者）为对象的第三言语接触场面（以下为“第三言语场面”）。

调查结果如下：「友人」谈话中，无论对方是否为日语母语者，CNS 都会按照日语语言规则，选择使用简体作为谈话的基调文体。但当谈话对象是日语母语者即对方言语场面时，CNS 更倾向于往敬体转换。另外，当谈话对方是日语母语者即对方言语场面时，CNS 倾向于在使用「附和语」时往敬体转换；与此相反，当谈话对方是非日语母语者即第三言语场面时，CNS 倾向于在表达「重要部分的明示及强调」时往敬体转换。这些倾向证明了日语学习者有关文末文体转换的使用受到了「谈话对象是否为日语母语者」这一语言外因素的影响。

1. はじめに

日本語は「デスマス形」(丁寧体)と「非デスマス形」(普通体)¹というスピーチレベルが文末形式に組み込まれている言語である。日本語母語話者は実際の会話において、場面や相手に応じて基調としてデスマス形か非デスマス形かという「基本的スピーチレベル」を設定し、また、相手との心的距離の変化や談話の展開などに応じて、デスマス形から非デスマス形へ、非デスマス形からデスマス形へという「スピーチレベル・シフト」を巧みに行いながら円滑なコミュニケーションを図っているとされている(三牧2007など)。このような談話におけるスピーチレベルに関するさまざまな調節を、本稿では、三牧(2013)に従い、包括的に「スピーチレベル管理」と称することにする。一方、学習者のスピーチレベル・シフトに関しては、母語話者には見られない学習者特有の要因によってスピーチレベル・シフトをする現象があることも指摘されており、さらに、その固有の要因は、学習者の言語運用能力の不足を理由に結論づけられることが多かった(上仲2005、田2009など)。しかし、陳・川口(2012)、赤羽(2014)、陳(2017)などの報告にあるように、言語習得を考える上で、話し相手が目標言語の母語話者か否かという要因が学習者内部に生じる日本語のバリエーションに影響を与える可能性は看過できないと考えられる。

そこで、本稿では、対話者が日本語母語話者であるか否かという違いが学習者のスピーチレベル管理にどのように影響するかを明らかにするために、日本語母語話者との相手言語接触場面(以下、「相手場面」)及

¹ 従来、文末形式のスピーチレベルを表す用語は研究者によって異なり、「丁寧体・普通体」(田2009、三牧2013、嶋原2014、高宮2017、など)、「敬体・常体」(申2009、など)、「デスマス体・ダ体」(伊集院2004、陳・川口2012、劉2013、など)、「デスマス体・非デスマス体」(高橋他2017、など)などがある。本稿では、宇佐美(2015)の「言語形式の丁寧度を示す形態」を表す「デスマス形」、「非デスマス形」という用語が、最も適切」(p.17)であるという指摘に従い、「デスマス形」と「非デスマス形」を用いることにした。

び非母語話者同士の第三者言語接触場面（以下、「第三者場面」）²という二つの場面を取り上げ、比較分析を行うことにする。具体的に、中国人上級学習者³（CNS）6名を対象とし、それぞれの会話場面に「対友人」会話を設定して、CNSが会話相手や場面に応じてどのような基本的スピーチレベルを選択しているか、どのような状況でスピーチレベルをシフトさせるか、把握することにする。

2. 先行研究と研究課題

2.1 先行研究のまとめ

スピーチレベル・シフトに関する研究は日本語母語話者を対象としたものと日本語学習者を対象としたものがある。

まず、母語話者対象の研究を概観する。スピーチレベル・シフトは生田・井出（1983）で取り上げられて以来、シフトが起こる要因及びその機能が明らかになってきた。先駆的な論考である生田・井出（1983）は、「待遇レベルのシフト」の機能として「話の心的距離の調節」と「談話の展開」を挙げた。三牧（1993）は、テレビの対談番組を資料として談話分析した結果、スピーチレベル・シフトが談話の展開標識として機能する場合、（1）新しい話題への移行、（2）重要部分（結論・結末・意思・事実・論点など）の明示、強調、（3）注釈・補足・独話等の挿入という3点が主要な機能であることを明らかにした。宇佐美（1995）は、普通体から丁寧体へシフトする条件として、新しい話題を導入する時、または新しい話題を導入する質問に答える時、ということを挙げて

² ファン（2006：p127-128）では、「相手言語接触場面」は、「参加者のどちらかが相手の言語を用いてインターアクションを取る場面」、「第三者言語接触場面」は、「参加者の双方が自分の言語ではなく第三者の言語でインターアクションを取る場面」と定義されている。

³ 調査対象者CNSと会話相手の日本語能力は、滞日期間（1年以上）、学習歴（800時間以上）、日本語能力試験（N1／1級）の資格によって上級と判定した。

いる。嶋原（2014）は、日本語母語場面における談話的条件下のアップシフト（「デスマス形」へのシフト）は「ユニット⁴を移行する時」「意見・結論を明示する時」に談話の展開を明確にするために使われていることを論じている。また、普通体を基調とした自然談話に現れる丁寧体に注目した研究として、劉（2013）、高宮（2017）などが挙げられる。劉（2013）は、友人3者間の自然会話をケーススタディとして「ダ体」（普通体）から「デスマス体」（丁寧体）へのスピーチレベル・シフトは、常套句／会話終了時の合図、相手への非難、対立する立場や意見の提示の3つの場合に観察され、話し手が相手と心的距離をわざと置くことによって自分の意見を堅持する戦略として用いられることが分かった。高宮（2017）では、同年代の友人同士や家族間といった親しい間柄で話される日常談話を分析対象とし、不平、非難、批判、反論、不同意といった不満を表明する際に丁寧体が用いられ、さらに、丁寧体へシフトすることにより、相手との良好な人間関係を保っていることが明らかになった。このように、日本語母語話者によるスピーチレベル・シフトについては、その機能がより精緻化される方向で解明されつつあると言えよう。

一方、日本語学習者を対象とした研究は、比較的新しく、上仲（2007）、寺尾（2010）などがある。上仲（2007）は、中国語を母語とする上級学習者1名を対象に調査した結果、学習者は短くて分かりやすく、使いやすい普通体を使うという、言葉の待遇面より機能面を重視する中間言語的な要素を明らかにしている。また、寺尾（2010）は、中国語を母語とする初中級日本語学習者と日本語母語話者を対象として、「対教師」「対友人」の二つの会話場面について、スピーチレベル運用の実態を縦断的

⁴ ユニットは、嶋原（2014）では話題を指しており、「ユニットを移行する時」は話題を転換する時という意味である。

に記述している。その結果、母語話者は場面に応じてスピーチレベルをシフトさせているのに対し、学習者は（１）引用節や従属節など、節を示すマーカーとして普通体を使用する、（２）否定文では普通体を優先するという、学習者のスピーチレベル・シフトの言語内的要因を指摘し、「学習者が独自の言語内的ルールを創り出している」（p.139）と述べている。

また、近年、外国人の増加により、非母語話者同士の第三者場面におけるスピーチレベル管理に対しても目が向けられ始めている（陳・川口 2012、高橋他2017）。陳・川口（2012）は、中国語を母語とする１名の日本語上級学習者CNSを対象とし、相手場面と第三者場面における「対友人」会話と「初対面」会話において、CNSのスピーチレベルがどのような選択基準によってシフトするかについて分析を行った。その結果、CNSのスピーチレベル・シフトについては、「対友人」であれ、「初対面」であれ、相手が母語話者である相手場面では丁寧体へシフトしやすいことが明らかになった。特に、「初対面」会話における普通体へのシフト要因を分析した結果、CNSは、第三者場面においては「聞き手領域」に関わる発話が普通体へシフトしやすく、相手場面においては「話し手領域」に関わる発話や「話し手自身に向けられた」発話が普通体へシフトする傾向があることが明らかになった。このことから、CNSの文末のスピーチレベル・シフトには、言語外的要因として、相手が日本語母語話者である場合にはよりへり下ろうとする「学習者独自のルール」が存在することが示唆された。高橋他（2017）は約１年間日本に滞在している知り合いまたは友人関係の学習者16名を対象に、第三者場面におけるスピーチレベル・シフトの機能について考察した。その結果、「非デスマス体」から「デスマス体」へのアップシフトの機能として、①ふざけや皮肉といった特殊な表現効果で親密性強調、②心的距離の拡大で

場の改まり強調、③相手のスピーチレベルに合わせることによる共感の表示、④聞き手目当ての発話⁵での配慮の表示、⑤重要情報の強調、⑥新話題への移行、⑦注釈・独話・補足の挿入を挙げている。更に、相手のスピーチレベルに合わせたシフトは相手場面で、親密性の強調を表すシフトは第三者場面で顕著にみられる学習者もいたことが明らかにされた。

このように日本語学習者を対象とした研究も見られるようになったが、非母語話同士の第三者場面を扱った研究は、管見の限りでは、上記の陳・川口（2012）と高橋他（2017）のみであり、まだ少ないと言えるだろう。また、陳・川口（2012）では、調査協力者である非母語話者の性別や日本語能力という属性が統一されていない。高橋他（2017）では、二者間の会話を中心であるが、三者間、四者間の会話も分析対象として採用されており、会話間の参加者の人数が統制されていない。以上を踏まえ、本稿では、第三者場面におけるスピーチレベル管理を考察するにあたって、調査協力者の社会関係、性別、年齢といった当該要素を統制した会話状況を設定することにする。

2.2 本研究の立場と研究課題

上記の背景を元に、本稿では「相手場面」と「第三者場面」における「対友人」会話に注目し、親しい友人に対するCNSのスピーチレベル管理はどのような選択基準によってなされるかを明らかにする。そのために、以下の2つの点に焦点を当て、分析と考察を進める。

- ①「相手場面」と「第三者場面」における「対友人」会話は、それぞれ、どのような基本的スピーチレベルが選択されるか。

⁵ 聞き手目当ての発話とは、高橋他（2017）では、聞き手に向けた発話を指している。

- ②「相手場面」と「第三者場面」における「対友人」会話は、それぞれ、どのような状況でスピーチレベル・シフトが行われるか。

3. 調査概要と分析方法

3.1 調査対象及び調査方法

本調査では、会話場面を「対友人」（「親－親」の社会関係）に設定した。また、会話参加者の社会的属性を統制するために、全データ協力者を大学に属する学部生と大学院生（20代の女性）とした。そして、第三者場面における相手の母語の要因を除くために、CNSの会話相手を韓国人上級学習者に統一した。これらの条件をもとに、中国人上級学習者（CNS）6名と友人関係にある日本人（JNS）5名、韓国人上級学習者（KNS）4名との2場面10組による自由会話を収録した。表1に会話参加者のインフォーマントを、表2に会話情報を示す。話題は自由で日常生活で行われる会話と同じような世間話でよいと伝え、1組15～20分間ずつの会話、合計約220分の会話を収録した。調査時期は2010年10月及び2016年6月であった。会話の収録が終了した後、フォローアップインタビューを行った。また、収録した10組の会話データを宇佐美（2006）の「改訂版：基本的文字化の原則BTSJ」に従って文字化した。

3.2 本稿における「スピーチレベル」の分析方法

本稿では、文末のスピーチレベルを伊集院（2004）の一部を参考に、大きく「デスマス形（Polite-form：P）」、「非デスマス形（Non-Polite form：N）」、「中途終了型発話（No-Marker：NM）」の三つの種類に分けることにした。「デスマス形（P）」は、言い切りのデスマス形や終助詞あるいは接続助詞が付いているデスマス形を含む。「非デスマス形（N）」は、言い切りの非デスマス形や終助詞あるいは接続助詞が付いて

表1 会話参加者のインフォーマント情報

調査協力者	日本語能力	出身地	母語	性別	年齢	滞日期間	日本語学習歴
CNS1	上級	中国	中国語	女	25	2年7ヶ月	5年6ヶ月
CNS2	上級	中国	中国語	女	21	1年	3年2ヶ月
CNS3	上級	中国	中国語	女	21	1年	3年2ヶ月
CNS4	上級	中国	中国語	女	23	1年8ヶ月	5年2ヶ月
CNS5	上級	中国	中国語	女	22	6年	3年
CNS6	上級	中国	中国語	女	24	1年8ヶ月	5年2ヶ月
JNS1	母語話者	群馬県	日本語	女	23	－	－
JNS2	母語話者	埼玉県	日本語	女	22	－	－
JNS3	母語話者	群馬県	日本語	女	20	－	－
JNS4	母語話者	千葉県	日本語	女	22	－	－
JNS5	母語話者	埼玉県	日本語	女	22	－	－
KNS1	上級	韓国	韓国語	女	27	4年	6年6ヶ月
KNS2	上級	韓国	韓国語	女	21	1年1ヶ月	7年
KNS3	上級	韓国	韓国語	女	21	1年	4年
KNS4	上級	韓国	韓国語	女	21	1年	4年

表2 会話情報

	相手場面	第三者場面
「対友人」会話 (親－親)	「CNS1－JNS1」場面	「CNS1－KNS1」場面
	「CNS2－JNS2」場面	「CNS2－KNS2」場面
	「CNS3－JNS3」場面	「CNS3－KNS3」場面
	「CNS4－JNS4」場面	「CNS4－KNS2」場面
	「CNS5－JNS5」場面	「CNS6－KNS4」場面

いる非デスマス形であり、名詞、副詞の一語文および名詞や形容動詞の語幹で終了している文を含む。「中途終了型発話 (NM)」とは、述部まで言い切られていないにもかかわらず、意図した情報の伝達が終了している発話を表す。

また、林 (2008) の「会話のストラテジーの中で、話者交替に最も強く結び付いているのが「あいづち」である」(p.17) という指摘に基づき、1 発話を成す「あいづち」を分析対象にすることにした。日本語記述文法研究会編 (2009) に示されたあいづち表現の待遇的意味に従い、「はい、ええ、はあ、いいえ、いえ」をデスマス形 (P)、「うん、おう、ああ、まあ、ううん、いや」を非デスマス形 (N) として扱うことにする。更に、本稿では、「へー」のような感嘆を表す発話や「ははは…」のような笑い声を表す発話は、文末のスピーチレベルの丁寧度が判断できないので、分析対象から除外した。また、第三者に向けられた言葉（「急ですが」など）をそのまま引用した発話文も、引用部分は直接に会話相手に向けられた言葉ではないため、分析対象から除いた。また、日高 (2005) は、相手に確認の問いかけをする推量形の「～でしょう」については、その丁寧体と普通体の丁寧さのレベルが、平叙文のそれとは同一ではないことを指摘し、更に、「普通体の「～だろう」は、通常の普通体のレベルより丁寧さの度合いが低く、特に女性語では丁寧体の「～でしょう」を用いるのが普通である」(p.71) と述べている。本稿では、分析対象が女性同士の会話であるため、以上の日高 (2005) の指摘に従い、「非デスマス形」を基調として設定した会話では、「～でしょう」で終わった発話文末のスピーチレベルを「普通体」すなわち「非デスマス形」として捉えることにした。以上の基準に基づき、発話ごとに文末のスピーチレベルをコーディングして集計した。

4. 調査結果及び考察

4.1 基本的スピーチレベルの選択及び選択基準

まず、両場面における「対友人」会話のCNSのスピーチレベルを表3-1と図1に示す。

表3-1 両場面における「対友人」会話のスピーチレベル

	発話数 (%)			
	デスマス形	非デスマス形	中途終了型	合計
相手場面	65 (6.9)	738 (78.3)	139 (14.8)	942 (100.0)
第三者場面	26 (2.7)	797 (83.8)	128 (13.5)	951 (100.0)
合計	91 (4.8)	1535 (81.1)	267 (14.1)	1893 (100.0)

$$(\chi^2(2) = 19.393, p < .001)$$

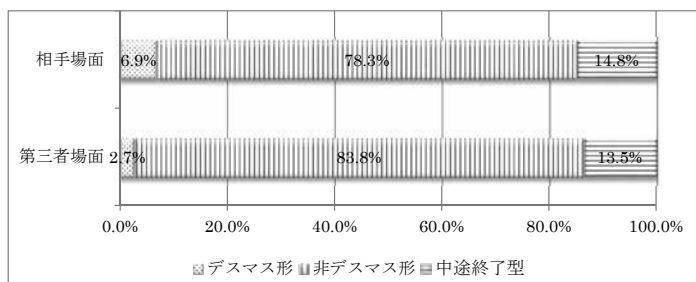


図1 両場面における「対友人」会話のスピーチレベルの出現率

この結果についてカイ二乗検定を行ったところ、0.1%水準で有意差があった ($\chi^2(2) = 19.393, p < .001$) ことから、「対友人」の場合、CNSのスピーチレベルの使用様相には相手が日本語母語話者であるか否かが影響することが把握された。

表3-1と図1をみると、「対友人」の場合、相手場面であれ、第三者場面であれ、CNSの最も出現率の高いスピーチレベルは非デスマス形

で、相手場面では78.3%（738話）、第三者場面では83.8%（797話）を占めている。つまり、対友人の場合、相手場面と第三者場面のどちらにおいても、CNSは基本的スピーチレベルを「非デスマス形」を基調として設定していることが分かる。

日本語の言語規範に従い、「対友人」会話の場合は、「親－親」の社会的関係があるので、非デスマス形が基本的スピーチレベルとして設定されるのが一般的である。したがって、上記の結果から、「対友人」会話においては、基本的スピーチレベルの設定に当たって、CNSは、相手が日本語母語話者か非母語話者かにかかわらず、日本語の言語規範に従い、「親」という社会的関係を考慮し、非デスマス形を選択していることが分かる。この基本的スピーチレベルの選択基準について、CNSはフォローアップインタビューでも、「相手が日本人かどうかにかかわらず、友人関係だから、非デスマス形を使うべきだと思う」と語っている。

しかしながら、CNSの基本的スピーチレベルの設定には相手が日本語母語話者か非母語話者かによる差は見られないものの、スピーチレベル・シフトには差が見られた。表3－1と図1を見ると、「対友人」会話の場合、CNSのデスマス形へのシフトは、相手場面では6.9%（65話）であるのに対して、第三者場面では2.7%（26話）と、相手場面の半分以下でしか起きていないことが分かる。さらに、表3－1について、残差分析を行った結果を表3－2に示す。

表3－2 残差の一覧表

	デスマス形	非デスマス形	中途終了型
相手場面	4.2***	－3.0**	0.8n.s.
第三者場面	－4.2***	3.0**	－0.8n.s.

(n.s. : not significant, ** $p < .01$, *** $p < .001$)

表3-2に示した残差分析の結果、デスマス形は相手場面で有意に高いのに対して、非デスマス形は第三者場面で有意に高いことが分かる。つまり、「対友人」の場合、CNSは、相手場面の方が第三者場面よりデスマス形へシフトする傾向が強いと言えよう。そこには、同じ「親しい友人」であっても、相手が日本語母語話者である場合には丁寧であろうとするCNSの意識が推測される。

4.2 「対友人」会話におけるスピーチレベル・シフトの状況及び要因

では、これらのスピーチレベル・シフトは、どのような状況で、どのような要因によって生起するのだろうか。ここでは、「対友人」会話におけるCNSのスピーチレベル・シフトが生起する状況及びその要因について分析する。4.2.1で相手場面と第三者場面のシフト要因について量的に比較分析したあと、4.2.2で発話機能によるシフト要因について質的に考察する。

4.2.1 相手場面と第三者場面のシフト要因

「対友人」の場合、CNSの非デスマス形からデスマス形へのシフトは、相手場面では65話であるのに対して、第三者場面では26話であった。これらの発話を、発話機能によって分類した結果、①「あいづち」、②「重要部分の明示・強調」、③「新話題への移行」、④「補足・説明の挿入」、⑤「情報要求」の5つに分類された。表4-1と図2はその結果を示したものである。

この結果についてカイ二乗検定を行ったところ、5%水準で有意差があった($\chi^2(4)=10.484$, $p<.05$)ことから、「対友人」会話の場合、相手が日本語母語話者であるか否かがCNSの「デスマス形」へのシフトに影響することが把握された。更に、表4-1について、残差分析を行った結果を表4-2に示す。

表 4-1 両場面における「対友人」会話の「デスマス形」へのシフト要因

発話機能	相手場面	第三者場面	合計
①あいづち	36 (55.4)	5 (19.2)	41 (45.1)
②重要部分の明示・強調	15 (23.1)	12 (46.2)	27 (29.7)
③新話題への移行	5 (7.7)	3 (11.5)	8 (8.8)
④補足・説明の挿入	6 (9.2)	3 (11.5)	9 (9.9)
⑤情報要求	3 (4.6)	3 (11.5)	6 (6.6)
合計	65 (100.0)	26 (100.0)	91 (100.0)

($\chi^2(4) = 10.484, p < .05$)

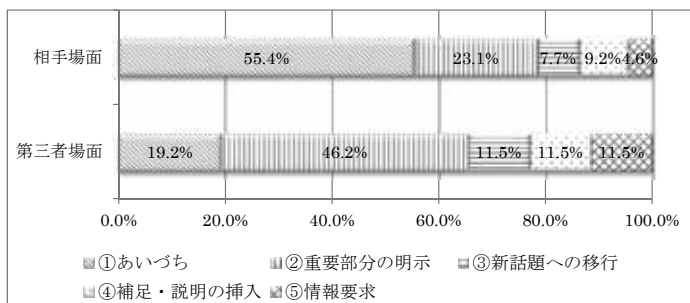


図 2 両場面における「対友人」会話の「デスマス形」へのシフト要因

表 4-2 残差の一覧表

	相手場面	第三者場面
①あいづち	3.1***	-3.1***
②重要部分の明示・強調	-2.2*	2.2*
③新話題への移行	-0.6n.s.	0.6n.s.
④補足・説明の挿入	-0.3n.s.	0.3n.s.
⑤情報要求	-1.2n.s.	1.2n.s.

(n.s. : not significant, * $p < .05$, *** $p < .001$)

表4-2を見ると、①「あいづち」と②「重要部分の明示・強調」によるシフトには場面の有意差があることが分かる。具体的には、①「あいづち」によるシフトは相手場面で有意に高いのに対して、②「重要部分の明示・強調」によるシフトは第三者場面で有意に高いと言える。

以下、それぞれのシフトについて、具体的な会話例に基づき、シフトの状況及び要因について検討する。

4.2.2 発話機能によるシフト要因の比較

まず、相手場面で有意に高い①「あいづち」によるデスマス形へのシフトについて分析する。

①あいづち

「対友人」の場合、CNSの「あいづち」による「デスマス形」へのシフトは、相手場面では55.4%（36話）、第三者場面では19.2%（5話）で、相手場面の方が有意に多く起こっていた。以下、相手場面における「あいづち」によるデスマス形へのシフトの例文を示す。

例1

- | | | |
|------|---------------------------------|-----|
| 11-1 | JNS1: で、そうしたら、その後は、 | / |
| →12 | CNS1: はい。 | (P) |
| 11-2 | JNS1: 例えば、 | / |
| →13 | CNS1: はい。 | (P) |
| 11-3 | JNS1: あのう、バイトをやめる時だね。 | (N) |
| →14 | CNS1: はい。 | (P) |
| 15 | CNS1: どのぐらい前、“一ヶ月前に言って” って言われる？ | (N) |

例1では、CNS1は12、13、14で「はい」というあいづちを3回用いている。3.2で指摘したように、「はい」は「上向き待遇」のあいづち表現であるため、本稿では、あいづち表現「はい」を「デスマス形」発話と同等に扱い、「はい」によるシフトをデスマス形へのシフトとして捉えた。

例1のような「はい」の他、あいづち表現「そうですね」によるデスマス形へのシフトも観察した。発話例を例2に示す。

例2

- 226 - 1 JNS4: じゃ、先生と子供っていうよりは、もう子供にこう
ちゃんと近づいて言ってあげることができるね、／
→227 CNS4: そうですね。 (P)
226 - 2 JNS4: すごいね、なかなかできない。 (N)
228 CNS4: えっ [↑]、なんで? (NM)

例2では、CNS4は227で「そうですね」というあいづち表現を用いて「デスマス形」へシフトしている。

相手場面における「あいづち」によるデスマス形へのシフト36話は、すべて例1と例2のような「はい」及び「そうですね」によるものであった。その中で、「はい」は23話、「そうですね」は13話であった。更に、この「はい」によるシフト23話はすべてCNS1の発話に集中しており、他のCNSの発話には見られないことが分かった。「あいづち」の「はい」の多用はCNS1の特徴とも考えられる。また、「そうですね」による13話のうち、11話はCNS4の発話に集中しており、残りの2話はCNS1の発話に観察された。

親しい友人に、あいづちをうつ時にデスマス形へシフトすることには

違和感があり、この言語行動から、CNS1とCNS4は、相手に応じて「そうだね」と「そうですね」及び「うん」と「はい」を使い分けるという「日本語のルール」が習得できていないのだろうか。しかし、第三者場面の「対友人」会話を見ると、CNS1があいづちをうつ時には、以下の例3と例4に示すように、すべて「そうだね」「うん」が用いられているのである。

例3

- 28 KNS1: こっちが長いけど、そっちも長いよね。 (N)
 29 CNS1: ね、〈笑い〉、長いよね。 (N)
 30 CNS1: うん、そっか、そっか。 (N)
 →31 CNS1: そうだね。 (N)
 32 CNS1: 長いよね。 (N)

例4

- 1 - 1 KNS1: クリスマスね,, /
 →2 CNS1: うん。 (N)
 1 - 2 KNS1: 私さ、最初は,, /
 →3 CNS1: うん。 (N)
 1 - 3 CNS1: こう休みを取って、こう、どこかへ行こうかなと思っ
 ったの。 (N)

つまり、CNS1は、「そうですね」と「そうだね」、「はい」と「うん」を相手に応じて使い分けられないのではなく、同じ「親しい友人」であっても、相手が日本語母語話者である場合には待遇の意味を重視して丁寧度が高い「デスマス形」を用いていることが推測される。

一方、CNS4の場合、あいづちをうつ時に、デスマス形へのシフトは「そうですね」に集中しており、相手場面と第三者場面ではそれぞれ11話と5話であった。しかし、例5と例6に示すように、非デスマス形のあいづち表現「そうだね」も両場面において用いられた。

例5

134 CNS4：女性にとっては、これはいいなあと思って。 (NM)

135 JNS4：うん、働きやすいよね。 (N)

→136 CNS4：そうだね。 (N)

137 JNS4：産休みたいなもの取りやすい。 (N)

例6

209 CNS4：ああ、キウィー、キウィーだ、知ってる知ってる
(うんうん)、食べる。 (N)

210-1 KNS2：これ、なんか、普通、その緑の色だけどね,, /

→211 CNS4：うん、そうだね。 (N)

210-2 KNS2：なんか、黄色いゴールドキウィーというものがあるけど、(うん)、それがめっちゃ美味しい、甘い。
(N)

両場面におけるCNS4による「そうですね」と「そうだね」の発話数を観察してみると、相手場面では、「そうですね」の発話数は11話で、「そうだね」は9話であった。一方、第三者場面では、「そうですね」の発話数は5話で、「そうだね」は14話であった。つまり、同じ「親しい友人」であっても、CNS4はあいづちをうつ時に、CNS4は相手場面では、「そうですね」と「そうだね」が拮抗しているのに対して、第三者

場面では、「そうだね」を「そうですね」の約3倍使用していることが分かった。

このように、情報内容を持たず、ほとんど無意識に発せられるあいづちの場合の「デスマス形」へのシフトが、相手場面では全体の半分以上(55.4%)を占めており、有意に多く起こっていたことから、「日本語母語話者には丁寧に話さなければならない」という意識はCNSの潜在意識にあるものと考えられ、CNS自身も気づいていない可能性が示唆される。

これはCNS1とCNS4に対するフォローアップインタビューの結果からも裏付けられた。CNS1とCNS4はフォローアップインタビューで「日本語を勉強し始めた時に、デスマス形が一番無難な使い方だと教えられたから、日本人と話す時に、失礼にならないように、デスマス形を使おうとする意識や、日本語の待遇的意味を考慮しなきゃいけないという意識が強い。会話相手が友達であっても、この意識がまだあると思う。この潜在意識の影響で、思わず「そうですね」と「そうね」及び、「はい」と「うん」を混せて使う」と語っている。

②重要部分の明示・強調

次に、第三者場面で有意に多く生じた「重要部分の明示・強調」の例文を示す。

例7

470 KNS2: 何っていうか、それがあれなんか、秋とか、冬よりは、
 (うん) 春とか夏の方がなんか、人間も元気も出るし、
 なんか、あっちこっち行こうっていう、その感覚が春
 と夏。 (N)

471 CNS4: うん。 (N)

- 472 KNS2: 面白い、私、秋と夏、秋と冬が弱い、(ああ)、秋と冬
は本当に早く家に帰ってごろごろしたいしか思ってい
ない、本当に。(N)
- 473 CNS4: へー、私は逆なんだよ。(N)
- 474 KNS2: へー、そうか。(N)
- 475 CNS4: 私、秋の方一番元気です。(P)
- 476 CNS4: 冬も、みんな…、なんか、私あんまり、あのう、冬は
寒くないと〈思ってるから〉{|}。(N)
- 477 KNS2: 〈うんうん〉{|}。(N)

CNS4は、472KNS2の「秋と冬の時に元気がない」という発話に対して、473で「へー、私は逆なんだよ」と自分は反対であることを述べている。続いて、475で「私、秋の方一番元気です」という重要部分を明示して強調する際に、デスマス形へシフトしている。このように、スピーチレベルをデスマス形に変化させることで、「秋の方一番元気です」という情報ははっきりと示し、重要部分を際立たせる効果もあると考えられる。嶋原（2014）が述べるように、談話的条件上のアップシフト（「デスマス形」へのシフト）は談話の展開を明確にする機能を果たしている。CNSの「重要部分の明示・強調」によるデスマス形へのシフトは、相手場面と第三者場面ではそれぞれ23.1%（15話）と46.2%（12話）で、第三者場面のほうが相手場面より有意に多く起こっていた。このことから、対友人の場合、CNSは、第三者場面では「重要部分の明示・強調」する状況で談話の展開を明確にするためにデスマス形へシフトする傾向が窺える。

③新話題への移行

続いて、「新話題への移行」による「デスマス形」へのシフトの例文を示す。

例8

255 KNS2:〈蒸し暑い〉{}? (N)

256 CNS4: うん、ちょっと低いから、(うんうん) なんか、〈明日〉{}。
(N)

257 KNS2: 〈で、空を〉{} 見ても、晴れという感じっていうより曇り、曇ってる、(うんうん)、なんか青あんまり見えない〈というか〉{}。
(N)

258 CNS4: 〈そうか〉{}、蒸し暑い、これが一番嫌だ。 (N)

→259 CNS4: 私、アレルギーの肌ですので、結構敏感の肌ですので、(うん)、梅雨の時、いつも、え、これ、出てきます。

(P)

260 KNS2: クーラー? (N)

261 CNS4: なんか、〈アレルギー〉{}。
(N)

262 KNS2: 〈アレルギー〉{} [↑]。
(N)

例8では、CNS4が258までは非デスマス形を用いてKNS2と「天気」の話題をめぐって話していたが、259でデスマス形へシフトすることによって、「アレルギーの肌」という新しい話題へ移行している。CNSの「新話題への移行」によるデスマス形へのシフトは、相手場面では7.7% (5話)、第三者場面では11.5% (3話) であった。

④補足・説明の挿入

「補足・説明の挿入」によるデスマス形へのシフトの例文を示す。

例 9

134 CNS4: 女性にとっては、これはいいなあと思って。 (NM)

135 JNS4: うん、働きやすいよね。 (N)

136 CNS4: そうだね。 (N)

137 JNS4: 産休みたいなもの取りやすい。 (N)

138 CNS4: ただ、一つがなんか、私からそう思ってるよ。 (N)

139 JNS4: うん。

→140 CNS4: 一つは、一つはとてもおもしろいと思って、おもしろい
んじゃなくて、おもしろいんじゃなくて (うん)、あの
う、いい点から (うん)、まず、週末があります。 (P)

141 JNS4: そうだね、土日〈休みね〉{ }。 (N)

142 CNS4: 〈土日〉{ } と、あの夏休み (うん) と春休み。 (N)

例 9 では、CNS4 と JNS4 が教員の職業のメリットについて話をしている。CNS4 は 138 で「ただ、一つがなんか、私からそう思ってるよ」と非デスマス形を用いて自分の考え方を提起した。続いて、140 で週末があるというメリットについて具体的に説明を始めた時に、デスマス形へシフトしている。三牧 (1993) が述べるように、文末のスピーチレベルを上げることで、その説明や補足の話に注意を向けさせると同時に、談話を進める働きがあると考えられる。CNS の「補足・説明の挿入」によるデスマス形へのシフトは、相手場面では 9.2% (6 話)、第三者場面では 11.5% (3 話) であった。

⑤情報要求

最後に、「情報要求」によるデスマス形へのシフトの例文を示す。

例10

15 JNS1: どのぐらい前、“一ヶ月前に言って” って言われる? (N)

16 CNS1: なんか、そこまでは…。 (NM)

→17 CNS1: 普通は一ヶ月ですか? (P)

18 JNS1: うんうん。 (N)

例10では、CNS1は、15JNS1の「どのぐらい前、“一ヶ月前に言って” って言われる?。」という発話に対し、16で「なんか、そこまでは…。」と言いさし、ここでは「言われていない」が省略されている。続いて、17で「普通は一ヶ月ですか?」とJNS1に対する質問する時に、デスマス形へシフトしている。

質問文による「情報要求」は、聞き手目当ての行為、つまり、相手に向ける行為である。メイナード(2004)は、正式に相手に向ける発話においてスピーチレベル・シフトが起こることを論じているが、CNSは、質問する時、つまり、相手から情報を引き出そうとする時に相手を意識して、デスマス形へシフトしたのではないか。CNSの「情報要求」によるデスマス形へのシフトは、相手場面と第三者場面においては同数の3話が観察され、有意差がなかった。つまり、両場面において、同様の意識が窺える。

5. まとめと今後の課題

以上、相手場面と第三者場面において、CNSのスピーチレベル管理は、親しい友人に対して、それぞれどのような選択基準によってなされるか、

分析した。その結果、以下のことが明らかになった。

まず、「対友人」会話においては、CNSは、基本的スピーチレベルの設定にあたり、相手が日本語母語話者か非母語話者かにかかわらず、相手場面と第三者場面のどちらにおいても、「日本語のルール」に従い、「親」の社会的関係を考慮し、「非デスマス形」を基調として選択している。また、CNSの「デスマス形」へのシフトは、「あいづち」、「重要部分の明示・強調」、「新話題への移行」、「補足・説明の挿入」、「情報要求」の5つの状況で起きたことが明らかになった。このことから、CNSのスピーチレベル・シフトには、前述した先行研究では挙げられた日本語母語話者と同様の、談話の展開を示す談話機能が反映されている。CNSはおおむね母語話者と同様に「基本的スピーチレベル」を選択し、巧みにスピーチレベル・シフトをしていると言えよう。

さらに、両場面の差に注目すると、CNSのスピーチレベルを分類した結果、相手場面ではデスマス形が有意に高いのに対して、第三者場面では非デスマス形が有意に高いことが分かった。つまり、相手場面の方が第三者場面より「デスマス形」へシフトする傾向が強いことが分かった。そこには、同じ「親しい友人」であっても、相手が日本語母語話者である場合には丁寧であろうとするCNSの意識が推測された。さらに、「デスマス形」へのシフトの状況を質的に分類した結果、相手場面では「あいづち」によるシフトが有意に高いのに対して、第三者場面では「重要部分の明示・強調」によるシフトが有意に高いことが分かった。つまり、CNSは、相手場面では情報内容を持たず、ほとんど無意識に発せられる「あいづち」の場合に「デスマス形」へシフトする傾向があるのに対して、第三者場面では、「重要部分の明示・強調」という場面で用いられ、談話の展開を明確にするためにスピーチレベル・シフトを行う傾向があることが分かった。以上の結果から、学習者のスピーチレベル・シフト

には、「相手の母語」という言語外的要因が影響を及ぼすことが明らかになった。

今後の課題として「疎」の場面の会話データを収集し、「親」の場面との比較分析を行いたい。

<参考文献>

- 赤羽優子（2014）「日本語非母語話者の日本語接触場面における心理面の調節」『計量国語学』29（5），pp.131-153
- 生田少子・井出詳子（1983）「社会言語学における談話研究」『月刊言語』12（12），大修館書店，pp.77-84
- 伊集院郁子（2004）「母語話者による場面に応じたスピーチ文末スタイルの使い分け—母語場面と接触場面の相違—」『社会言語科学』6（2），社会言語科学会，pp.12-26
- 上仲淳（2005）「日本語非母語話者に特有のスピーチレベルのシフト要因—中国語を母語とする上級日本語学習者の接触場面から—」『社会言語科学会第16回大会発表論文集』，社会言語科学会，pp.160-163
- 上仲淳（2007）「中国語を母語とする上級学習者のスピーチレベルの選択基準」『大阪大学言語文化学』16，大阪大学言語文化学会，pp.141-154
- 宇佐美まゆみ（1995）「談話レベルから見た敬語使用—スピーチレベルシフト生起の条件と機能—」『学苑』662，昭和女子大学近代文学研究所，pp.27-42
- 宇佐美まゆみ（2006）「改訂版：基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese：BTSJ）2005年2月25日改訂版」『自然会話分析への言語社会心理学的アプローチ』言語情報学研究報告13、

- 東京外国語大学大学院地域文化研究科21世紀COEプログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」, pp.21-46
- 宇佐美まゆみ (2015)「日本語の「スタイル」にかかわる研究の概観と展望—日本語会話におけるスピーチレベルシフトに関する研究を中心に—」『社会言語科学』18 (1), pp.7-22
- 嶋原耕一 (2014)「母語場面及び接触場面の同等初対面会話におけるアップシフトについて」『社会言語科学』16 (2), pp.66-74
- 申媛善 (2009)「韓国人日本語学習者の文末スタイルの運用—時間軸に沿った敬体使用率の変化に着目して—」『日本語教育』(140), 日本語教育学会, pp.81-91
- 高橋美奈子・谷部弘子・本田明子 (2017)「第三者言語接触場面におけるスピーチレベルシフトの機能—日本語学習者同士の自然談話の分析から—」『ことば』38, 現代日本語研究会, pp.46-62
- 高宮優実 (2017)「普通体を基調とした自然談話に現れる丁寧体について—不満を表明する際のアップシフトに着目して—」『ことば』38, 現代日本語研究会, pp.63-82
- 陳新・川口良 (2012)「中国語を母語とする日本語上級学習者の文末スタイルシフトに関する一考察」『言語と文化』25, 文教大学, pp.70-100
- 陳新 (2017)「中国語を母語とする日本語上級学習者の割り込み発話に関する一考察—相手言語接触場面と第三者言語接触場面の比較—」『言語文化研究科紀要』3, 文教大学大学院, p.21-50
- 寺尾綾 (2010)「文末形式の運用とスタイル切り換え—日本語を学ぶ中国語母語話者の縦断データから—」『阪大日本語研究』22, 大阪大学院文学研究科日本語講座, pp.113-142
- 田鴻儒 (2009)「中国における上級日本語学習者のスピーチレベルの使

- い分け—初対面会話の年齢に応じて—」『大阪大学言語文化学』
18, 大阪大学言語文化学会, pp.169-181
- 日本語記述文法研究会編 (2009)『現代日本語文法 7 談話／待遇表現』
くろしお出版
- 林宅男 (2008)『談話分析のアプローチ：理論と実践』研究社
- 日高水穂 (2005)「ケース11 ことばの切りかえ」上野智子他編集『ケー
ススタディ日本語のバラエティ』おうふう, p.66-71
- ファン, S. K. (2006)「接触場面のタイポロジーと接触場面研究の課題」
『日本語教育の新たな文脈—学習環境、接触場面、コミュニケーションの多様性—』独立行政法人国立国語研究所編, 株式会社ア
ルク, pp.120-137
- 三牧陽子 (1993)「談話の展開としての待遇レベル・シフト」『大阪教育
大学紀要 第1部門』42 (1), 大阪教育大学, pp.39-51
- 三牧陽子 (2007)「文体差と日本語教育」『日本語教育』134, 日本語教
育学会, pp.58-67
- 三牧陽子 (2013)『ポライトネスの談話分析—初対面コミュニケーションの姿としくみ—』くろしお出版
- メイナード, 泉子・K. (2004)『談話言語学：日本語のディスコースを創
造する構成・レトリック・ストラテジーの研究』くろしお出版
- 劉雅静 (2013)「友人同士3者間会話におけるスピーチレベルシフトに
ついて—上下関係のある親しい友人同士の会話データをもとに—」
『言語学論叢オンライン版』6, pp.34-68